

## 琉球舞踊の系譜

金 城 光 子

1988年度、秋の舞踊学会は沖縄県立芸術大学を主会場として開催された。

学会員4人という少数の運営で、果たしてどの程度の企画が展開できるのかと思案しながら学会を終える事が出来、学会本部の役員の方々、群司、松本、片岡、その他事務局の皆様方のご尽力に新らためて感謝する次第です。

沖縄は芸能の宝庫といってもよい程で、100万余の人口が点在する島々に分布しており、数多くの歌舞が、年中行事や祭り、祭祀などこんぜん一体となって生活化されていることは周知の通りである。

いわゆる沖縄は、日本の西南端の60余の島々が点在し、地理的には東南アジアの玄関とも言われる、沖縄本島、宮古諸島、八重山諸島の三つに区分される亜熱帯地である。

500年余の琉球王朝時代を背景とした歴史的な島の人々の生活は、自活組織をつくり独自の生活文化、民俗文化を育成してきたことはすでに多々述べられている通りである。

現在、沖縄をカルカチュアライズし象徴化したうたがある。

「唐(中国)の世から大和(日本)の世」、「大和の世からアメリカ(米国)世」、「アメリカ世から大和(日本復帰)の世」という俗歌であるが、これは長い年月の世代の激流の中にある沖縄の人々の悲喜こもごもとした心象表現を如実にあらわしている。

本質的には大和民族の文化を根底にしながら東南アジア、南中国等の多様な芸能の要素を消化し、独自の固有芸能の様式性を整え形成して今日に到っている。

ここでは、歴史的、民俗学的背景に沿った芸能文化の類型化は割愛し、秋の学会における内容とねらいの概略を報告するにとどめたい。

舞踊学会が各地域の舞踊文化の探求によるアプローチの視点、角度、採現を見出しつゝ、人間の“踊り”“舞う”という行為と存在の本質性を追求することも一つのねらいで有るならば、沖縄で学会を開催する意味や意義を問わなければなりません。琉球舞踊は、

東洋舞踊というジャンルの中で、扮装、小道具、装束、化粧、技法、構造と形式、内容と歌、メロディとリズムなど、動き要素、空間要素、時間要素が、人類の文化遺産としてどのような位置づけ

で類型化され比較検討されるのであろうか。

しかも先述のように、現在の沖縄の人々の生活や生活現象は、和式と洋式と琉球式という三つの文化をうまく日常化している中で、芸能という独自文化への執着が根強い。

そこで、「伝統芸能鑑賞会」「レクチュアデモンストレーション」は、解説や分析検討の発表形式より、「百聞は一見にしかず」の形をとり、一貫した「琉球舞踊のすべ」の演舞の中に包含する特色性や象徴性や様式性をみてもらうことにした。「鑑賞会」は、男踊り、女踊り、男女打組踊り(デュエット)、仮面踊り、松竹梅鶴亀などを見る事で、「レクチュアデモンストレーション」の内容への橋渡しになるようにプログラムを編成した。演自と出演者は下記の通りである。

伝統芸能鑑賞会

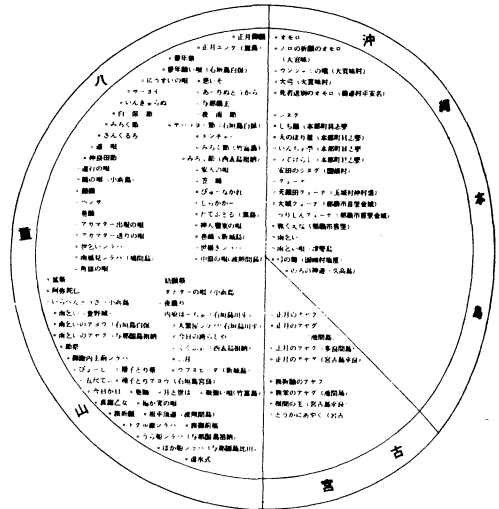
演目と出演者

一、上り口説	赤嶺 正一
二、加那よー	金城 光子
三、前ぬ浜	島袋 光壽
四、獅子舞	池原 悦子・石原 幸江・玉城 敦子・前川美智子
五、小浜節	真境名直子
六、鳩間節	赤嶺 正一
七、しゅんどー	(美女)宮城 幸子・玉城 冴子 (醜女)喜納 幸子・安次富紀子
八、松竹梅	我那覇則子・比嘉 淳子・玉寄 幸子・玉城 律子・中川 鈴子
九、かせかけ	玉城 節子
十、仲里節	谷田 嘉子・金城美枝子

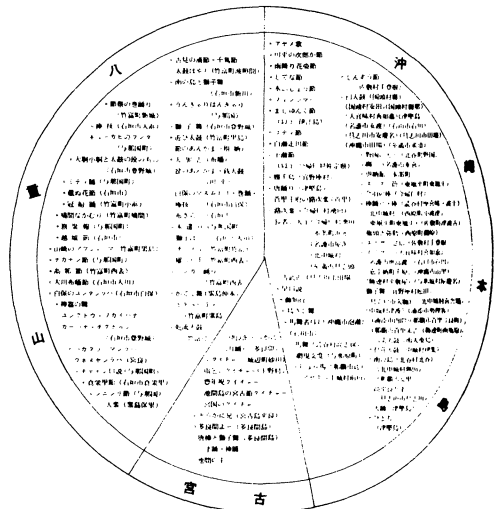
「レクチュアデモンストレーション」は、一部と二部に区分し、「横道氏の真踊(古典)の構造と技法」と「民俗芸能と雑踊り」と題し、内容を

分担した。「雑踊り」とは古典に対する近代舞踊のことである。

## 1. 祭祀音楽と舞踊



## 2. 民俗音楽と舞踊



### レクチュアデモンストレーション

#### 第一部 真踊の構造と技法

#### 第二部 民俗芸能と雑踊り

|| 祈り・こねり綾なすリズムの舞い踊り ||

横道 萬里雄  
例示演技 又 吉 静 枝

(沖縄県立芸大)

金城 光子  
(琉球大学)

## 第二部 民族芸能と雑踊り

——祈り，こねり綾なすリズムの舞い踊り——

1. 祖先崇拝の沖縄は、旧暦の行事と祭りや歌舞は一体化して共同体意識の中で行なわれる。沖縄本島、宮古諸島、八重山諸島には、まだまだ多数の部落単位の歌舞が現存するが、一応下記の図表にまとめられる。詳細については、いずれ報告させていただきます。

島の人々が生存し、生活するためには、常に「祈り」「願い」「感謝」が念じられる。

祈りの内容は、

- ①衣・食・住たりてこそ生命を維持すること。
- ②人と人との心のつながりこそ愛と平和の根本である。

を主要因としてとなえられる。

2. 村落、部落は各自の生き方の理念に従っておらが村の歌舞やしきたりや、祭式を方式化してきた。人々の祈り願い、舞い踊り、祭りの行為は、神々へのそんげんと神との一体化による平穏無事

なる幸せと純な心であろう。

歌舞を媒体として、「人の道」「生きるすべ」「生命の尊さ」を知る。

3. 琉球王朝文化を反映する宮廷舞踊、音楽、劇は、古典舞踊～真踊～として継承され、現在、さらに洗練された形として踊られている。これに対して、

明治期に、民謡に振りつけられた、庶民の生活現象や心情を題材にして農、漁村の風俗文化ともいえる素朴な踊りが近代舞踊「雑踊り」であり、古典の「静」に対して「動」であり、風俗習慣、生活文化を反映させている。



4. レクチュアデモンストレーションの演目は、一部の古典の様式性は別にして、二部では「舞い」「踊い」の原点と原型をみつめつつ、庶民の踊り：祭り芸能、農・漁村の踊り、町方の踊りが舞台芸術として形成される時に展開した内容である。「踊り上る心理・手や手首をこねり、緩なすりズムが舞と踊りを形式化した」のである。

5. 琉球舞踊の音楽研究は、即舞踊との表裏一体をなす。琉球舞踊曲の奏者と三団体のキャラクターを知り、沖縄の踊りアプローチへの一助にする事は有意義なことと考え下記に挙げた。

						安富祖流絃声会	
胡弓	太鼓	笛	琴	歌・三味線			
山内秀雄	島袋光史	大湾清之	多和田スミ	玉城正治	西江喜春	照喜名朝一	
						野村流古典音楽保存会	
		太鼓	笛	琴	歌・三味線		
		島袋光史	嘉数世勲	城間安子	島袋盛一	糸数善昭	桑江徳太郎
						野村流伝統音楽協会	
太鼓	胡弓	笛	琴	歌・三味線			
比嘉邦子	新城清弘	喜舎場孫好	高良時江	新城次治	大城次男	知念達雄	中村一雄

\*1988年度秋季第26回舞踊学会  
『舞踊學』第12号別冊より転載